

瞿秋白と上海大学（1922－1927） ——第一次国共合作期の文学と革命——

斎藤 敏康*

はじめに—中国における「文学革命」とマルクス主義の受容—

一般に中国における文語文から口語文への文体改革、口語詩の試み及び西洋近代文学思想の受容は1917年の「文学革命」に始まるとされる。胡適は『新青年』（2巻5号、1917年1月）に「文学改良芻議」を発表して「古人の模倣をやめる」「文法にかなう文章を書く」、常套語、典故、対句を避けるといった文体の改革を提唱した。それらは直接的には文章表現方式にかかわる提言であったが実際には文体の近代化をつうじて中国にヨーロッパ近代文学が根づくことを考えていた。『新青年』編集者であった陳独秀はいち早く胡適の「改良芻議」を推戴するとともに、同じ号に「文学革命論」を発表して国語改良運動を社会変革と結びつけた。すなわち貴族趣味、人文趣味を脱却して「国民文学、写実文学、社会文学」を造ろうと主張したとき、陳独秀は明らかに「近代ヨーロッパの文明史」を彩る「革命」を意識しており、また辛亥革命の反動で跋扈する復古的な政治思想を一掃する爆発源として切実にそれを待望していた。

そして陳独秀が「文学革命論」を展開した8か月後にロシア革命が勃発する。第一次大戦の終結に際して書かれた李大釗の二編の評論「庶民の勝利」「Bolshevismの勝利」（『新青年』5巻5期、1918年）は中国の知識人がロシア革命をどのように受け止めたかを典型的に語っている。大戦を勝利に導いたのは連合国の軍事力ではなく「世界人類の新しい精

* さいとう・としやす 立命館大学経済学部特任教授

神」すなわち十月革命の精神であり、勝ったのは軍閥政府や資本家政府ではない、「全世界の庶民」こそ勝利者なのであり、「資本主義の敗北、労働主義の勝利」であるという。孫文が指導する中華革命党機関紙「民国日報」はソビエト・ロシアを「民主友邦」とし、ボルシェビキを「過激派」から「新派」と言い換えたばかりではなく、孫文はレーニンに対して祝賀の電報を打っている¹⁾。野村浩一氏が述べるようにロシア革命は中国にとってほとんど「啓示」的な意味をもっていた²⁾。そのように1918年から19年にかけて、「民国日報」だけでなく「毎週評論」「新潮」「労働」「太平洋」などでロシア革命が盛んに論じられ、マルクス、レーニン、ボルシェビキが学生、知識人をとらえることになる。1919年5月、「五四運動」が起こるさなかに発行された「新青年」（6巻5期）は「マルクス主義」を特集した。そこに象徴的に示されるように、山東半島の主権回復を求めて立ち上がった北京の学生の思想的原動力はすでに啓蒙思想からマルクス主義に転換していたといえる。

このように中国において「近代文学」が課題として語られはじめた時、世界ではすでにマルクス主義の国家が生まれており、国民国家の樹立を目指す民族主義革命運動にもロシア革命の成功の影響は広く及んでいた。つまり中国の近代文学はその重要な部分が思想的にはマルクス主義を受容した、ないしはその洗礼や影響を強く受けた知識人によって担われたといっても過言ではない。西欧はもとより日本においてもマルクス主義思想が文学に影響を広げる以前に近代文学の豊穡な時代を経てきているが、中国の場合は近代文学の思想とそれを担った知識人の思想との間に“捩れ”が存在する。西欧近代文明を前に民族的な危機感を深める中国にあってマルクス主義の影響を受けながら、しかし（マルクス主義の文学ではなく）近代文学を受容しようとする少なくない知識人が、20年代初めに成立した中国共産党の初期の黨員となる。そのような例として直接には瞿秋白、茅盾、田漢、蔣光慈、などを想起しているが丁玲や施蛰存、

戴望舒、杜衡など、その影響を受けた世代の人生にもマルクス主義と近代文学の間の“振れ”は、濃淡はあれ投影していると言えるのではないか。そしてこの“振れ”を典型的に体現しているのが国共合作と国民革命の機運を背景に設立された上海大学であり、具体的には学部、教員構成と大学が掲げる理念・目標及びカリキュラムであると思われる。小論ではこの大学の設立にあたって教学的骨格を定めた瞿秋白について、その文学思想の形成と初期共産党員としての政治活動から文学と思想の“振れ”がもった意味について考えてみたい。結論をやや先取りする形で言えば、この“振れ”は中国近代文学のいわゆる後発性に起因するだけではなく、国共合作という1920年代に特徴的な政治プロセスの所産でもあるということができる。

I. 瞿秋白の文学観と国共合作

(一) 瞿秋白の略歴と国共合作

瞿秋白は多面的な才能をもった人物である。士大夫的な人文学を基礎として、五四文化運動期には西欧的啓蒙主義に傾倒し、ロシアではマルクス主義を受容。やがて中国共産党の政治理論家として台頭し、20年代後半の一時期は党の最高指導者の地位につくも、34年に国民党に捕らえられまもなく処刑される。丁玲は瞿秋白の抜きこんでた文学的才華を評価するが³⁾、それに加えてマルクス主義研究者、党指導者という多方面の才能を繋いでいるのはジャーナリスト的な資質であるように思われる。「晨報」記者として革命後間もないロシアに足を踏み入れ、社会のあらゆる階層の人々の中に飛び込んで現実をレポートすることによって鍛えられた思考方法と行動様式がその人格を造形している。

瞿秋白は1899年、江蘇省常州の没落した「仕宦之家」、すなわち地方官僚の家に生まれる。11年、辛亥革命、15年、貧困を苦に母が自死し、

勉学を放棄して小学教員へ。この体験が自我の形成に影響をあたえたと
思われる。17年、堂兄の瞿純白に伴われて北京へ。北京大学で陳独秀、
胡適らの講義を傍聴。9月、北洋軍閥政府外交部設立「俄文專修館」（ロ
シア語専門学校、3年制）に入学。19年、五四運動に参加、逮捕、北京
大学法科に設けられた臨時監獄に拘禁⁴⁾。20年、『新社会』、『人道』雑
誌などを創刊、学業の傍ら積極的な社会評論活動。3月に『ロシア名家短
編小説集』を編み、その序文で「中国のこの暗く悲惨な社会にあつて、人々
はみな今の生活から新しい道を切り拓きたいと思っている。ロシアの古
い社会が崩れ行く音を聞きながら、人里離れた谷の、微かな人の足音に
心が高鳴らずにはいられない。それだから誰もがロシアを研究し論じよ
うとする。そしてロシア文学はすでに中国の文学者の目標になっている
のだ」⁵⁾と述べてロシア革命の隠喩である「微かな足音」に瞿秋白自身
が胸を高鳴らせたのである。

20年、李大釗の指導の下に鄧中夏ら北京大学の学生が集って「マルク
ス学説研究会」が発会すると瞿秋白も直ちに参加。五四運動の頃から師
事している李大釗の他、陳独秀の知遇も得る。10月、俄文專修館の卒業
を待たず北京晨報館と上海時事新報の要請により特派員としてモスクワ
に赴く。数カ月を要したハルピン、シベリアからモスクワへの紀行文が『餓
郷紀程』⁶⁾、ロシア滞在中の青年のまなかに映じた心象風景が『赤都
心史』⁷⁾としてまとめられている。瞿秋白は列国の干渉戦争から新経済
政策（ネップ）にいたる時期のロシアを系統的にレポートしたジャーナ
リストとしてもっと注目されてよいと思われる。また滞在中に「ロシア
革命論」や「新ロシア文学史」などをまとめるとともに、社会主義革命
と東西文明論など当時議論になったテーマにも深い関心を示しているが、
残念ながら本論の主題ではない。ただ、後の国共合作を指向する政治活
動との関係で以下の事実には触れておきたい。すなわち特派員としてレー
ニン、トロツキー、ルナチャルスキーら要人と会見しスターリンとも面

識を得ている。モスクワ滞在中に張太雷の紹介で中国共産党に入党し、東方労働者大学で中国班教員としてロシア語教育や政治理論講義の通訳にあたっており、この時期の留学生には劉少奇、羅覚、彭述之、任弼時、卜士奇、蕭勁光らが含まれている。とりわけ、22年1月にモスクワで開かれた極東各国共産党及び民族革命団体第1回代表大会に参加した中国代表团（張国燾、張太雷、王燼美、鄧恩銘、于樹徳、鄧培ら）の一員として加わり、ジェノヴィエフが行った報告を通訳している。さらに中国代表团がレーニンと懇談した際も瞿秋白が通訳を行い、この席でレーニンは中国側に国共合作の可能性について尋ねている。周知のようにソビエト及びコミンテルンは誕生間もない中国共産党に対して強く国共合作を働きかけるのだが、瞿秋白はモスクワにおいてその策源地の一つに立ち会っていたといえるであろう。

1922年12月、瞿秋白は陳独秀の求めに応じてモスクワから帰国する⁸⁾。帰国後は李大釗の推薦で北京大学教授になることが決まっていたというが辞令がおりず、左派系誌として再刊された季刊『新青年』編集責任者を経て、中国共産党第三回全国大会に参加した後、上海大学教務長兼社会学科主任に就任する。

（二）中国共産党の国共合作路線（二段階革命論）と瞿秋白の役割

23年6月、中国共産党第三回全国大会（三全大会）が広州で開催され、中央委員に選出された瞿秋白はこの時から正式に中央指導部に加わることになり宣伝部門の責任者に就く。そして陳独秀の下にあって国共合作路線の形成に積極的に関わっていくことになる。

この大会で国共合作方針の確立に大きく関与したのは陳独秀であったが、瞿秋白は「中国共産党 党綱領草案」⁹⁾を執筆しており、陳独秀の校閲を経て瞿秋白自身が提案している¹⁰⁾。

「中国の重要な工業の大部分は列強や軍閥、官僚の手に握られ、中国ブルジョアジーの手元にはほとんどない。農民の正面の敵は当然、列強と軍閥である。従って中国のプロレタリア階級は先ず全力をあげて国民革命の推進に加わり、農民を目覚めさせ、これと連合し、小康に甘んじるブルジョア階級を促して徹底した革命に引き込まねばならない。革命という手段によって庶民の真の民権を打ちたて、すべての政治的自由と完全で真正の民族独立を勝ち取らねばならない。その上でさらに宗教的社会的な害毒の一掃に務め、国民革命の速度を速めねばならない。」〔六、中国プロレタリア階級の責任〕

「資本主義の搾取に反対する労働者階級の闘争はすべて必然的に政治的であり、今日、帝国主義に反対する中国労働者階級の闘争もいうまでもなく同様である。労働者階級が資本主義に反対しようとしても、政治的自由の権利がなければ、経済闘争を行って自らの経済組織を発展させることは決してできない。中国の労働者庶民が軍閥制度に反対する意味もまたここにある。しかし、労働者階級は奪取した政治権力を用いて生産手段を社会に共有にすることで、その最高の目的に達するのであるから、中国のプロレタリア階級は当然“国民革命”の段階にとどまるわけにはいかないのである」〔八、中国プロレタリア階級の闘争方法〕

少し長く引用したのは当時のソビエトやコミンテルンの政治理論や文体を瞿秋白がいかに自在に操ることができていたかを示したかったからである。こうしたいわばコミンテルン調の文章は当時誰もが綴りうるものではなく、同時期の陳独秀がマルクス主義の解釈から中国革命の方針を確立する思考において、論理、概念、用語の未習熟や不統一が少なくないことと比べても、瞿秋白の明晰さは群を抜いていたといえるようである。陳独秀は瞿秋白の草稿に三か所だけ簡単に手を入れて完成稿とし

たという。

こうして、帝国主義、外国資本、軍閥勢力を打倒するために国内の資産階級と共同して民主主義的革命を成功させる。そして獲得した自由と権利を活用しながら貧苦にあえぐ農民と連合して無産階級独裁をめざす第二の闘いを進めるという二段階革命論、すなわち中国革命の性格を民族民主主義革命と規定する路線が定められる。さらに三全大会では「国民運動と国民党問題に関する決議案」が採択され、孫文が指導する国民党と中国共産党の統一戦線戦略と組織形態が定められた。共産党員が党籍を保持したまま、個人の資格で国民党に参加する方向がめざされることになる。

武装蜂起や議会における合従連衡ではなく「国民運動」を通じて革命を目指すためには近代政党を組織し、労働運動、農民運動を指導し、商人、民族資本家と連携するといった大衆運動をすすめるための幹部、知識人の養成が急務であり、具体的には五四運動の洗礼を受けた若い世代をいかに革命運動に導くかが課題となる。その事情は共産党だけではなくソビエトの党組織原理を援用して近代政党への脱皮を模索していた孫文と国民党においても同様であった¹¹⁾。

Ⅱ. 上海大学の創設と「二つの使命」

（一）上海大学の設立

上海大学は1922年10月に設立され、27年4月、「4.12事件」のさなかにやむなく閉校するまで、わずか5年間存在しただけの大学である。前身は前年春に設立された東南高等専科師範学校（創設者は王理堂）であって、閘北青雲路に校舎があり、学生は160人。国文、英文、美術専攻科からなる小規模な学校であった。しかし有名人の名前が並ぶだけで講義はなく、設備は貧弱、経営も不明朗であり、学生の追及を受けた王校長

は学校の運営資金を持ち逃げして東京へ留学してしまうありさまであった。学生の中には地方で五四運動に参加し退学処分を受けて上海に流入してきた者も少なくなく、まもなく周学文、汪鉞、陳蔭楠、孔慶仁、王德慶、程永言ら十名の学生が中心になって、「革命的な大学」への改組をめざして活動を始めた。陳藻青、陳東阜ら学生に協力的な教員がいた上に、劭力子（仲輝）の支持が得られることになり、劭力子の口添えで于右任を校長に担ぎ出すことに成功した。陳独秀を校長に推す声もあったがあまりにも旗幟鮮明であったために敬遠され、代りにこの年の10月に靖国軍総司令を辞して上海に居を構えたばかりの于右任が校長に決まったといわれる¹²⁾。

自らも文学院教授として「欧州文学史」を講じた茅盾は回想している。

「平民女学校は党が作った最初の学校であり、上海大学は二番目の学校だった。（中略）于右任は校長だったが名義的なもので、実質的な運営はすべて共産党員が担っていた。当時の上海大学は正真正銘の“下町（弄堂）大学”だった。（弄堂は上海語で北京の胡同と同じ。この名称は世間では上海の一般の“野鷄”大学を誇る際の用語であり、“上大”もまたこう呼んで嘲笑した）」¹³⁾

上海大学の運営と教学を実質的に支えたのは、23年4月に赴任して「事務長」を務めた鄧中夏と、23年7月に共産党三全大会に出席した後、「教務主任」に就任した瞿秋白であった。鄧中夏、瞿秋白を招聘する相談の場に同席した程永言の証言がある。

「于右任、劭力子、両氏は“上大”の校務について相談するために福州路の同興楼京津菜館に李大釗、張繼、両先生を昼食に招待し、程嘉咏（永言）も座に招待されて、都合五人。もっぱら“上大”の校務が話

題であり、張、李兩人に協力を願いたいということであった。張氏は南洋へ行って募金に取り組みたいと意向を表明し、後に学校は歓送会を催したが、結局行かなかった。李先生はその場で鄧中夏（安石）先生を事務長に、瞿秋白先生を社会学系の主任に任用するよう紹介した。于、劭兩氏は早速、程（嘉詠）が代表して宝山路へ行き、鄧先生が学校で執務することを歓迎する旨伝えるよう命じた。（中略）

それから暫くして、瞿秋白先生が就任し、蔡和森、惲代英、張太雷の諸先生も相次いで教授に就任した。このころ、中国文学系主任（学部長）は陳望道、英国文学系主任は教務長の何世楨が兼ね、美術系主任は以前からそのまま洪野先生が就いていた。社会学系でマルクスレーニン主義を講じるほかに、他の系や学科の哲学課程も多くは社会学系の教授が兼ねていた。“上大”ではしたがってマルクスレーニン主義が思想理論及び行動の指針であった。李大釗先生こそははじめて“上大”にマルクスレーニン主義の旗を立てた人なのである。上海大学は名実ともに東南地方における革命のための最高学府となった。」¹⁴⁾

鄧中夏は中国労働組合書記部主任でもあり、仕事は繁忙をきわめていたというが、その中で上海大学規約や教育方針を確定し、教材資料を収集した。鄧中夏、瞿秋白は五四運動、「マルクス学説研究会」の頃から思想的、人格的に李大釗の指導の影響を深く受けており、上海大学への推輓もそうした李大釗との関係が背景にあることは容易に想像できる。

ただ、上海大学についての回想記の類を読んでいると関与した立場によって大学の印象が異なっており、学生であった程永言のように共産党系の人物は上海大学を「党の大学」と考えがちである。しかし上海大学という組織全体は決して「党の大学」であったわけではない。まず名誉理事には孫文が就いており、理事には蔡元培、汪精衛、李石曾、章太炎、張繼、馬宝山、張静江、馬君武ら二十数名が名を連ねている。実際に教

学や運営に携わった国民党系の人物としても楊杏佛、葉楚倫、張君勱、何世楨、洪禹仇、陳德微、楊明軒らがいる。この他、開学にあたって柏文蔚、柳詒子も于右任の校長就任を促している¹⁵⁾。こうした背景には、もともと胡漢民、馮自由、戴季陶のようにロシア革命を天啓と受け止め、新文化運動を通じて社会主義を論じた国民党系知識人も少なくなかったという事実がある。

程永言が紹介した以外の有力な教職員を「上海大学教職員一覧表」¹⁶⁾から拾ってみると、「中国文学系」では、劉大白、田漢、兪平白、沈雁冰（茅盾）、傅東華、周頌西、何世楨、何世枚、劭詩舟、蔣光慈など、「社会学系」では、安体誠、周建人、曾傑、「大学部選科」には郭任遠、卜達礼、呉志青、「美術系」では陳抱一、李超士、仲子通、傅彦長などがおり、さらに「英数高等補習科」、「中学部」も併設していた。

中国文学系のメンバーは劭力子の尽力で集められた復旦大学関係者が多い。劭の他に葉楚倫、劉大白、劭詩舟らがそうである。傅東華は後に復旦大学の教授になる。兪平白は北京大学を出て、文学研究会で活動していた。田漢も中国少年学会で活動する傍ら、南国社を主宰し雑誌『南国』半月間を編集しており、茅盾も商務印書館に所属し『文学月報』に携わるなど、ほとんどの教員は兼任であったと思われる。周建人は魯迅、周作人兄弟の末弟。紹興師範学校から上海神州女学大学教授に転じ、上海大学では「生物哲学」を担当していた。美術科の陳抱一は東京美術学校に留学した経験をもち、後に近代中国の洋画の発展に貢献した。南洋公学に起源をもつ南洋大学（上海交通大学の前身）出身者も多く、ニューヨーク大学、ミシガン大学、グラスゴー大学、パリ美術大学、東京帝国大学等の留学者も名を連ねていて、キャンパスは狭隘、学生数も六百人ほどの大学であったが、講師陣はいずれも年若く錚々たる陣容を整えていたといえる¹⁷⁾。

このように上海大学は進行しつつあった国共合作を先取りするような

高等教育機関であったが、さらに言えば、国共合作運動の内実の多くがそうであったように、上海大学の場合も国民党の領袖が職位の上位を占めるものの、教育の現場ではロシア革命の影響を受けてマルクス主義を受容した共産党系知識人が大きな影響力をもっていたことは否めない。

矛盾は次のように回想している。

「1923年7月8日、中共上海地方委員会兼区執行委員会は第一次会議を開催し、中共第三回大会に出席した代表から三回大会の決議を伝達された。併せて改選が行われ、会議は徐梅坤、沈雁冰、鄧中夏、甄南山、王振以の五人を上海地区委員会委員兼区委員会委員に選出した。7月9日、地区委員会兼区委員会第一回会議が開催され、鄧中夏が委員長に決定した。瞿秋白と張太雷、鄧中夏、施存統、王知一、許徳良、林蒸など11人が一つの党組織（上海大学）に編入され、林蒸が代表になった。（上海の全党員は四つの党組織に編入された）」¹⁸⁾

つまり、当時の上海の四つの党組織の一つが「上海大学」小組であり、その構成員は瞿秋白、張太雷など11人であったという。

（二）上海大学の「二つの使命」

——瞿秋白「現代中国において必要とされる〔上海大学〕」

瞿秋白の、23年の春から夏にかけての党活動及び言論活動には目まぐるしいと言える程の展開がある。6月の12日から20日にかけて広州で党綱領報告をしているさなかに刊行された『新青年』季刊第1期（6月15日）に「新青年の宣言」を發表し、『新青年』は「中国無産階級革命の羅針盤」と述べて、共産党の季刊誌的な位置づけを明確にしている。また第1期には「国際歌」（インターナショナル）の中国語訳を發表しただけではなく、レーニンのコミンテルン第四回大会の報告「ロシア革命の五年間」を訳

載したのをはじめ数編の文章を載せている。さらに瞿秋白はこの第1期に梁漱溟の哲学批判である「東方文化と世界革命」を書いている。7月1日には共産党中央として『前鋒』を創刊し「帝国主義の中国侵略の様々な方式」など三篇の評論を書いている¹⁹⁾。その後、上海共産党の会議を経て、7月20日頃、教務主任として上海大学に着任するのである。そして瞿秋白はこのころまでには上海大学を南方における「新文化運動の中心」とする方針を固めていたようである。

胡適に当てた7月30日付け書信では、「個人的」には静かに研究と翻訳に向かいたいが、生計のためにやむなく上海大学の教務の職に就いた、この上は頑張って責任を果たしたいと綴った後、次のように述べている。

「私は少し考えるところがあって、すでに兪平伯に宛て文章を一篇書きました。平伯が先生にお会いした時にはきっと話題にすると思います。私たちと平伯は上大が南方の新文化運動の中心になれるよう期待しています」²⁰⁾

如上の言説から読み取れることは、『新青年』季刊においては中国革命戦略や党派的主導権を語りながら、上海大学の教学は胡適も包摂しうる「新文化運動」を指向するとしていることである。そして実はこのいわば「二重基準」は上海大学の「二つの使命」の中にも持ち込まれていると言わなければならない。上海大学における教学の基本的な考え方について、瞿秋白は次のように述べる。

「俄然、“西洋人”を見かけることが多くなったここ十年から二十年で、錢莊は銀行に変わり、商舗は公司に変わった。“どこか生きている幽霊のよう”に外国の銀行団が飛び出してきた密かに中国の国家経済を掌握している。数万里離れたロンドン、ニューヨークから中国商業界の

金融を支配しているこれらの“厄介者”の背後には世界資本主義——現代社会の最も複雑な現象がある。そのため中国の思想界では期せずしていわゆる“社会改造”の思潮が湧き起こった。しかしながら単純な頭脳（社会現象の名称もまともではない）をもってしてこの種の複雑な対象——この対象が何かすら知らない——を研究しても、結局、恐慌をきたすことになるのだ。

ここ数年、空論的な社会主義思想が系統的な社会科学研究に進化した。これは改革すべき対象が確実に理解されはじめ、また実際運動から進むべき方向が演繹された結果であり、——確かにこれは当然の傾向である。

それだけではなく、上に述べた原因によって現在、中国の古い文化と生活は次第に崩壊しており、文学芸術の面では多くの新しい要求が生まれている。——個性の発展、学術の民衆化などである。

したがって“文学革命”はすでに三分された天下のうち二つを得ている。社会現象が日増しに複雑になるにつれて、文学の革命の要求が出、さまざまな科学の需要に応じていかざるを得ない——文学は元来すべて科学の道具である。この道具の改良が実際に中国の新しい社会と生活にとって必要条件であることは、中国で外国語が学ばれ、翻訳されて、その言語要素が中国文に引用されているのを見るだけでも、その必要性が日増しに高くなっていることがわかるのである。事情は芸術にとっても同じことである。

中国文芸の中で“舶来物”の受容は決して“国粹の衰退、文化の没落”の証しではなく、むしろ中国文化の転機であり、中国の新しい文化と生活（再生）の端緒である。数年来、運動は、初めはゆっくりと伝わりはじめ、続いて徐々に広く伝播して新しい制度に取って変わっている——これもまた当然の傾向である。

社会科学の研究を深化させ、新文芸の制度を構築すること——この

二つがすなわち“上海大学”の当然の任務であり、“上海大学”の存在すべき理由である。」²¹⁾

瞿秋白にあっては、上海大学で行う社会科学（マルクス主義）研究の目的は、その理論を中国社会の現実に応用して中国革命を遂行するためである。『瞿秋白文集』（政治理論編）には瞿秋白が通常の講義や夏季講習のために準備した講義録がかなり収録されている。たとえば「社会哲学概論」「現代社会学」の二編は、上海大学社会学系の講義のために編集された六科目の講義録から成る『社会科学講義』（全4冊）²²⁾の中の二科目の講義録である。「社会科学概論」「新経済政策之意義」はいずれも1924年の夏期講座として行った講演会の原稿である。ほかに「現代民族問題講義」「国民革命与階級闘争」などがあるが、後者は上海大学の学生（馬凌山）が筆記し冊子にして発行したものである²³⁾。

他方、文学・文化の課題は、一挙に無産階級の文化の創造やソ連の新文芸の受容と応用に向かうのではなく、西洋的な文学思想を導入することによる、儒教的な古い文化思想の克服と、口語を基礎にした新しい言語、文字の創造である。それは文明史的な近代の課題と言える。ここには振れあるいは矛盾が存在する。つまり社会科学においては社会主義が指向されるが、人文科学においては中国の西欧的資本主義への転換が展望されている。しかしこの振れ（矛盾）は必ずしも瞿秋白自身の思想文化論のレベルで生じている振れ（矛盾）ではない。以下の文学批評は、カーニンらの若くして没した詩人を偲びながら、文化の階級性を強調して、新文学の作家たちが無産階級の立場に立って労働者階級の価値観や思想感情、及び政治社会的な闘いを描くことを求めた「赤色ロシア新文芸時代の第一燕」の冒頭部分である。

「ロシア革命は世界政治史の新しい時代を切り開いただけでなく、人

類文化の新しい道をも切り開いた。

欧州中世末期の教会文化が18世紀啓蒙派によって覆され、それに続いて浪漫派詩人の狂風が吹き荒れたが、すでに完全に打ち負かされていわゆる“近代”——資産階級文化にその地位を取って代わられてしまった。現代はこの近代文化が絶頂期にあつて、さらに“ベストが猖獗する下での盛宴”が開かれており、これもまたその地位を取って代わられなければならない。——国際的な一流の文学者がすべてプロレタリア階級に同情を寄せることくらいはありうることだ。あの時声高に凱旋した所謂“自由、平等、博愛”は徐々に実は空疎であることをさらけ出し、その権利を標榜した“平民”ももはや事実上甚だ曖昧模糊としたものになってしまった。真の平民はプロレタリア階級だけであり、真の文化はただプロレタリアの文化だけなのである。」²⁴⁾

つまりソ連の新文学の息吹に触れて帰国した瞿秋白が、1923年段階で、個人の観点で文学を語れば、たとえばこのようになる。上海大学の「二つの使命」において、中国の革命はマルクス主義に基づいて遂行されると述べたことと、ここで、真の文化はただプロレタリアの文化だけであると断定することとの間には“捩れ”は存在しない。

またそうした文学観に立って20年代前半の創作を批評したのが「荒漠里——1923年之中国文学」²⁵⁾であろう。瞿秋白は23年の白話文学文壇の文学風景を「無辺無際の荒涼たる砂漠」と比喩し、「文学革命の勝利は、まるで武昌革命の軍旗のようなもので、革命が勝利すると軍旗も兵營の中に隠してしまうのだ」「文学革命政府が五千年の牛鬼蛇神の象形文字政策を継承したあと、建設は誠に困難を極めている。“文学の白話、白話の文学”はいずれも落ち着く場所をもたない。“民族国家の運動”には、西欧でもロシアでも必ず民族文学という先触れがあつた。それは民族統一の精神の拠り所であつた。“中国のラテン文”は廃されたが中国の現代文

はまだ達成されていない」、それは「偽古典主義でなければ外国古典主義である」と批評する。

「文学の白話、白話の文学」は言うまでもなく胡適の「国語の文学、文学の国語」を踏まえている。「偽古典主義でなければ」云々は兪平伯の新詩「憶」への批評であり、朱自清の「毀滅」に対しては「近年の散文と小詩は、すでに中国の現代文言の鍛錬を始めているかのようだ」と述べる。自ら編集する『新青年』季刊第2期に、陶畏巨なる筆名を使って掲載したこの批評は五四白話文学に対する瞿秋白の本来的な、つまり無産階級文学的な見地から歯に衣着せず批判した一文と見なすことができよう。こうした観点はロバート・オーエンを批評した文章²⁶⁾にも見出せるし、梁漱溟や呉稚暉に対する哲学批判²⁷⁾にも通底する。逆に自ら訳載したゴーストの「労働の汗」²⁸⁾やローザ・ルクセンブルクの文学観を紹介した小文「新しい宇宙」²⁹⁾などでは労働者を描く文学や屈することのない“紅玫瑰”（赤いバラ）の革命精神に対する深い共感を少しも隠さない。このように「現代中国においてあるべき〈上海大学〉」を執筆した前後において、瞿秋白は一方では五四新文学を教学の柱に据えた学部教科課程を提唱しながら、他方では協力を仰いだ胡適や兪平伯をはじめ周作人なども含めて五四派の文学への「批判」を控えていないのである。

このように見てくると、上海大学教学の「二つの課題」は、瞿秋白個人の文学的見解の枠を超えて、1920年代の中国の社会制度及び文化思想状況に対応する、国民国家を展望した文化的統合の課題を意識していたとすることができるだろう。そして他方それはまた中国共産党の二段階革命論に基づく国共合作路線に即応した文化路線でもあったと言わなければならない。

(三) 施蛰存が経験した「上海大学の精神」

その上海大学に23年秋に入学したのが施蛰存、戴望舒、杜衡ら、後に

モダニズム作家・詩人として、雑誌「現代」を舞台に活躍する一群の人々であった。かれらは、当時はまだ鴛鴦蝴蝶派文学の影響下で文学活動を行っており杭州で同人誌を発行していた。かれらが上海大学を目指したのは何よりも新文学に対する憧憬や嫉妬を抑えられなかったためであるといえるが、大学の講義あるいは文学や政治の活動を通じて西欧近代文学に対する認識を深めるとともに、鴛鴦蝴蝶派文学と新文学の間には深い溝が存在することも悟るようになるのである³⁰⁾。ここでは入学して間もなく施蛰存が書いた文章によって上大の学生の生活と矜持を紹介したい。

施蛰存は22年7月に松江の江蘇省立第三中学校を卒業した後、杭州の私立「之江大学外国語文系」に入学した。この大学はキリスト教会が運営するいわゆる「教会大学」であり、施蛰存はここで英語を学ぶ傍ら、タゴールやバイロンを愛読した。また学生同士の鴛鴦蝴蝶派文学サークルであった「蘭社」に参加して、戴望舒、杜衡、張天翼、葉秋原らと相知り、毎号数ページほどの『蘭友』という小型文芸誌を発行して文学活動を始める。一方、大学生生活の方は宗教的な雰囲気濃厚な生活に我慢ができず、宗教批判を始め「宗教侵略反対」の言論を発表して大学に睨まれ、結局退学処分を待たずに、23年2月末「自主退学」したという³¹⁾。この年の7月、松江で恽代英、蕭楚女、鄧中夏、劭力子、沈雁冰など上海大学の黨員メンバーが中心になって行った講演活動を通じて「新文化」の息吹に触れたことが上海への憧憬を深める一因となったと思われる。8月下旬に施蛰存、戴望舒、葉秋原、杜衡の四人は新しい文学を求めて勇躍、上海に乗り込む。

施蛰存は23年10月、大学設立一周念記念特集を企画した「民国日報」副刊「覚悟」に寄稿した「上海大学の精神」³²⁾と題する文章で大要次のように述べている。

〔一、上海大学の学生〕学生は、四川、陝西、安徽、広東など全国から

来ているが、校舎が狭いなどと不満を述べるものはほとんどいない。彼らは剛毅不拔の勇氣を持って、遠い所から敢えて上海大学にきたのは名利や大学のブランドではなく、苦しみに耐えて学問を求め、新中国を建設する労働者になるためだ。学生が吸収する知識や学問は決して書物や教授の講義に限定されない。ただ教場や自習室で本を読んで、ノートを取るだけという偏った無味乾燥な方法は、我々は採らない。

〔二、上海大学の教授〕教授はキャンパスに居住してはいないが、講義の時だけやってきて終わったらすぐに帰るような先生は一人もいない。担当科目の責任を尽くすだけではなく、学生の理解度や自主的な研究に関心を寄せて指導を工夫してくれる。上海大学の教授の真骨頂は雑誌などに発表される文章の中に見られる。先生たちは現代の中国の学生をよく知っており、学生の活動を押しさえつけたりせず、むしろ熱心に助言し指導してくれる。

〔三、上海大学学生の生活〕1、政治的には、滅茶苦茶で破廉恥な北京政府の下にあって、我々が依拠すべき真に中国を救う課題を国民に提示すること、これが政治上、上海大学生のやるべきことである。2、社会的には、近年、大学の社会学系は流行の学科であり学生も殺到しているが、そのほとんどは英文原典を外国人の教授について読んでいただけだ。外国の現実における社会学なのだ。上海大学の社会学の先生は中国の社会的現実を反映しない教材は決して使わない。「我々は我々の社会学的知見を検討し、外国の社会学の学説を参考にして、実際に中国社会に応用することをめざしている」。3、美術においては、美術系の学生たちは一年時の初めから積極的に画会を組織して優れた作品を生み出している。4、文学においては、百人余の学生が中国文学系にいるが、上海のどの大学と比べても多彩である。詩、小説、戯曲を創作する学生が各種の文学刊行物でいつも作品を発表している。文学研究会も存在する。英文系は30～40名だが、毎週、英語による演説会を開いており、そのため毎日、演

説の稽古に余念がない。所帯は小さいが元気澆刺である。最後に、以前つまらない大学に在籍していたことがあるが、上海大学はまるで違って、私はとても大人しい人間なのだが、澆刺とした上海大学の薫陶を受けて、知らず知らずのうちに活動好きになってきた。精神は形式よりも重要であることを、教育者には留意していただきたい。

「民国日報」副刊「覚悟」には劬力子、劉大白、施存統、沈雁冰、瞿秋白、胡適らが常時執筆している。先生たちが常連である新聞に、大学一年生の施蛰存が、おそらくテーマを与えられ推薦されて書いたのであろう文章が載せられたわけである。気負いと緊張からか、型にはまった生硬な文体は、ふだん施蛰存が詩文をものするときのタッチとは程遠い。しかしここには学生の自主性を重んじる大学で「国民革命」の息吹を全身で受け止めている施蛰存がいるように思われる。

おわりに

上海大学は1925年の労働運動（5・30事件）で学生、教員が逮捕され、キャンパスも一時閉鎖されるなどの影響をこうむる。さらに27年、蒋介石が共産党や左派の弾圧に乗り出し（いわゆる4・12クーデタ）国共合作が崩壊すると、大学はもはや存続も許されなくなり閉校のやむなきにいたる。

28年になると上海の租界を舞台にして「革命文学論争」が起り、蔣光慈ら共産党員が多かった太陽社や多くが短期間に共産党に加わった創造社同人はソビエト文学理論や福本イズムなど西欧マルクス主義理論に依り、魯迅や茅盾をブルジョア文学の大立者に見立てて近代文学批判を始める。論争を通じてマルクス主義文学論への理解と認識が深まることにより、ある意味で上海大学の「二つの使命」がはらんでいた“捩れ”（矛盾）は解消された。しかしそれはマルクス主義に依拠して党内で文化分

野の活動をになうようになる文化党員と「新文学」を継承して多様な創作や演劇活動を展開しようとする作家・芸術家との分離の始まりでもあったのではないか。その分離の只中であって茅盾や田漢、蔣光慈など上海大学に関わった初期の党員文学者が党と距離を置くようになる。学生であった丁玲や施蛰存、杜衡などもその文学の本質において「党の文学」との乖離は大きかった。閉校後、重慶や上海で国民党の影響のもとで活動した文学者も勿論少なくなかった。30年代文学の多彩な展開の中で、時に論争などの形で表出する対立の複雑さと根深さは、上海大学の理念としての「二つの使命」をも飲み込んで行った国共合作及び国民革命の崩壊という民国史の転換期に、その淵源を求めることができるように思われる。

注

- 1) 楊奎松「清末民初中国社会思想由激进进到革命的演变—着重于中国易受到俄国十月革命影响的内因问题」(第67回日本現代中国学会 共通論題③、2017年10月)
- 2) 野村浩一『中国革命の思想』(岩波書店、1971年)
- 3) 丁玲「我所认识的瞿秋白同志」(河北人民出版社『丁玲全集』第6巻、1986年)
- 4) 瞿秋白は俄文専修館の学生として五四運動に参加している。5月6日、北京中等以上学校学生聯合会(北京学聯)が成立、瞿秋白は俄文専修館代表として北京学聯指導部の一人として活動、逮捕され臨時監獄とされた北京大学法科の学舎に拘禁される。「試験では入れなかった北大法科に逮捕されて入ることができた」と語ったと言われる。(周永祥 編書『瞿秋白年譜』広東人民出版社、1983年)
- 5) 『「俄羅斯名家短篇小説集」序』(北京「新中国」雜誌社、1920年)
- 6) 1922年、上海商務印書館出版、人民文学出版社『瞿秋白文集』(文学編1、1985年)所収
- 7) 1924年、上海商務印書館出版、人民文学出版社『瞿秋白文集』(文学編1、1985年)所収
- 8) 「赤俄之归途」(1923年1月)人民出版社『瞿秋白文集』(政治理論編1、1988年)

所収

「ソ連での社会哲学理論研究は久しきに及んだが、現実の社会生活についてはロシアの歴史と現代の環境があるばかりで、中国社会は存在しない。異国に客にとっては中国の書籍も手にしがたい。現代が研究できないのみならず歴史研究も成り難い。そこで一度帰国することに決めたのである」と述べる。すでに哲学理論研究の成果を中国の現実に応用することにより多くの興味を感じていることが伺える。

- 9) 人民出版社『瞿秋白文集』（政治理論編 2、1988 年）所収
- 10) 野沢豊編『中国国民革命史の研究』（青木書店、1974 年）参照。陳独秀の「二回革命論」については同書所収の今井駿「陳独秀と国民革命—「二回革命論」の理論構造についての一試論—」参照
- 11) 西順蔵編『原典中国近代思想史』（第四冊、岩波書店、1977 年）参照。該書には国共合作のプロセスを示す国民党、共産党両党の政治文書が収録されている。またロシア革命の国民党への影響については、石井規衛「ロシア革命とコミンテルン——〈ロシア革命〉の誕生と東アジアへの連鎖」（『岩波講座 東アジア近現代通史』第 3 巻、2010 年）参照
- 12) 于右任は国民党左派で孫文と親交の深い軍人であった。「国民党与社会党」（『東方雑誌』20 周年記念号、1924 年 1 月）と題する文章では「社会党（共産党のこと…斎藤）は新しい政治活動の党であるが、党の多くの青年は主義主張を持っており、闘える人物だと聞く。かれらに全幅の希望を寄せたい」と述べている。
- 13) 茅盾『茅盾回憶録』〔六〕「文学与政治的交錯」（『新文学史料』1980 年 1 期）。なお、「上大」が誹謗の意味をもつ所以は、子どもが初めて文字を習う手習い帳（紅模子）が「上大人、孔乙己…」と始まることから、レベルの低い大学と皮肉ったものと考えられる。
- 14) 程永言「回憶上海大学」（『上海 党史資料叢刊』1980 年第 2 輯。黄美真、石源華、張雲編『上海大学史料』復旦大学出版社、1984 年、以下『上海大学史料』からの引用の場合は『史料』とのみ記す）
- 15) 中共上海史委党史研究室著『中国共産党上海史—1920—1949—』（上海人民出版社、1999 年）
- 16) 『史料』p51-54
- 17) 斎藤敏康「施蛰存・載望舒、上海大学で新思潮・新文学を学ぶ」（日本中国友好協会『研究中国』刊行委員会編『研究中国』第 4 号、2017 年 4 月）

- 18) 注 13 に同じ
- 19) 丁景唐、文操 合編『瞿秋白著訳系年目録』（上海人民出版社、1959 年）
- 20) 『史料』 p13-14
- 21) 人民出版社『瞿秋白文集』（政治理論編 2、1988 年）所収
- 22) 『社会科学講義』（全 4 集）（上海書局、1924 年）
- 23) 瞿秋白におけるマルクス主義の特徴や影響関係については瞿秋白記念館が編集する『瞿秋白研究』（No1～No18、2017 年現在、学林出版社、南京大学出版社など）にかなりの研究論文が掲載されている。たとえば丁守和「論瞿秋白の哲学思想」（『瞿秋白研究』8、1996 年 8 月）は瞿秋白のマルクス主義論におけるブレハーノフやカリエフの影響を指摘する。
- 24) 「赤色ロシア新文芸時代の第一燕」（『小説月報』15 卷 6 号、1924 年 6 月初出。人民文学出版社『瞿秋白文集』文学編 2）収集
- 25) 「荒漠里——1923 年之中国文学」（人民文学出版社『瞿秋白文集』文学編 1、1985 年）所収
- 26) 「欧文的新社会」（人民文学出版社『瞿秋白文集』文学編 1、1985 年）所収
- 27) 「猪八戒——東西文化与梁漱溟具稚暉」（人民文学出版社『瞿秋白文集』文学編 1、1985 年）所収
- 28) 「労働的汗」（人民文学出版社『瞿秋白文集』文学編 1、1985 年）所収
- 29) 「新的宇宙」（人民文学出版社『瞿秋白文集』文学編 1、1985 年）所収
- 30) 注 17 に同じ
- 31) 「我的創作生活之歷程」（1933 年）（『施蛰存全集』第 2 卷、「北山散文集」第一輯、2010 年所収）
- 32) 「上海大学的精神」（『民国日報』副刊「觉悟」23 年 10 月 23 日、『史料』 p14-18）